

## 現代経営学演習 (8単位) 担当教員： 上林 憲雄

### I. テーマと目標

専門職学位論文の執筆へ向けた研究指導を行います。研究領域は、経営学の中でもとりわけ人的資源管理論、人事労務管理論、経営組織論や人事制度設計に関連する諸分野となりますが、私企業の経営組織のみならず、NPOや行政等の公的組織、さらに広く社会制度設計や労使関係の研究も射程に含まれます。これらすべてに共通する「組織」や「人間」、「社会」の基礎となる概念や理論を習得し、最終的に学位論文へ結びつけようとするのが、この現代経営学演習の目標です。

より具体的な領域やトピックス、キーワードの一例を挙げれば、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)、ダイバーシティ・マネジメント、組織フラット化、ビジネス教育、キャリア開発、モチベーション、リーダーシップ、(ポスト)成果主義、エンプロイヤビリティ、技術革新と組織改革、技能・ノウハウの伝承、国際人的資源管理、等々です。

多くの社会人院生の皆さんに共通する特徴は、現実的な状況やデータについては情報として知っていても、それを分析したり表現したりする方法がわからないことです。では、どうすれば「研究」ができ、「論文」が執筆できるようになるのでしょうか。こうした学問の方法論的基礎から学習を始め、各自の問題意識を高めつつ、専門職学位論文のリサーチ・クエスチョン、リサーチ・デザインへとつなげられるよう指導していきたいと考えています。

### II. 教科書・参考書

各位の個別テーマに応じて都度参考書を紹介しますが、次の4冊は基本的事項がかなり網羅的に説明されている教科書としてお勧めです。1が最も基本的、2、3、4の順に難度が少しずつあがります。

**1. 上林憲雄ほか『経験から学ぶ経営学入門』有斐閣、2007年。**

学部学生向けの教科書ですが、経営学の知識を全く有していない方でも理解が可能なように平易に書かれていますので、学部学生の時分に経営学を体系的に学んだことのない方には一読をお勧めします。

**2. 上林憲雄・厨子直之・森田雅也『経験から学ぶ人的資源管理』有斐閣、2010年。**

上記『経験から学ぶ経営学入門』の姉妹書、人的資源管理論編です。人的資源管理の基礎がわかりやすく講述されています。

**3. 奥林康司・上林憲雄・平野光俊 編著『入門・人的資源管理(第2版)』中央経済社、2010年。**

2より少しだけアドバンストな内容を含む人的資源管理のテキスト。人的資源管理論の全領域が、基礎から応用、先端トピックスに至るまで、体系的に理解できます。

**4. ブラットン=ゴールド著、上林憲雄ほか訳『人的資源管理—理論と実践』文真堂、**

2009年。

英国で最もよく売れているHRMテキストの邦訳版です。いわゆる「クリティカル・シンキング」に依拠しながら、「なぜそうなるのか」を初学者に理解させることを目的に書かれており、論調はハードでやや難解ですが、世界のレベルを知ることができます。MBAのコア科目OB&HRMの指定テキストです。

**5. 上林憲雄・三輪卓己編著『ケーススタディ：優良・成長企業の人事戦略』税務経理協会，2015年。**

具体事例の紹介がなかなか難しい人的資源管理の領域で、日本企業8社がグローバリゼーションや市場主義の進展に直面し、HRM面でどのような変革をしたかが紹介された、読みやすい書籍です。

**6. 上林憲雄編著『人的資源管理』中央経済社，2016年。**

基礎から応用までを網羅した新しいテキストブックです。経営学の何の予備知識がない人が読んでも理解できるように工夫されています。自分の頭で考えることや主体的に調べることが念頭に置かれ、上林研究室を巣立った気鋭の若手研究者12名による執筆です。

なお、上林のこれまでの研究概要を知っておきたい方のために、単行本として刊行されている書籍に限って以下に掲げておきます。いずれも学術書のため、読みづらい部分が含まれています。

- 奥林康司，上林憲雄ほか『柔構造組織パラダイム序説——新世代の日本的経営』文眞堂，1994年。
- 上林憲雄『異文化の情報技術システム——技術の組織的利用パターンに関する日英比較』千倉書房，2001年。
- 上林憲雄編著『変貌する日本型経営——グローバル市場主義の進展と日本企業』中央経済社，2013年。
- Kambayashi, N., *Cultural Influences on IT Use*, Palgrave MacMillan, 2002.
- Kambayashi, N., Morita, M. and Okabe, Y., *Management Education in Japan*, Chandos, 2007.
- Hara, T., Kambayashi, N. and Matsushima, M. (eds), *Industrial Innovation in Japan*, Routledge, 2008.
- Kambayashi, N. (ed.) *Japanese Management in Change*, Springer, 2014.

### Ⅲ. 授業内容の要旨と授業計画

以下がシラバス作成時点での授業予定です。ゲスト講師の都合によって多少前後することもあります。お含み下さい。

**1. 8月5日：イントロダクション+各位の研究関心**

1限：「研究」とは何か、研究指導とはどのようなことか、ゼミをどのように進めていくか等について概略をお伝えします。特に、経営組織や、より広く社会という対象に対してアプローチする方法について皆さんと議論しながら、MBA課程で研究することの意味について考察します。上記の教科書1の「補章」（367～387頁）を各自で読んできてください。

2限：ゲスト講師による発表。MBAでの研究の在り方と注意点について議論します（調整中）。

3-5限：ゼミ生各位より研究テーマないし研究関心について報告。簡単なレジュメを準備してください。

## **2. 9月23日：リサーチ・クエスチョン**

1-5限：各位より報告。8月5日での発表時のコメント及び宿題を受け、その後の進捗について報告。とりわけ、研究で最も重要なリサーチ・クエスチョン（と結論の方向性、その問いを解明してどのように自社に提言できるか）について皆でディスカッションしながら進めます。

## **3. 12月23日：研究の方法論について、ゲスト講師を交え指導及び演習**

1-2限：文献レビューの進め方、ケーススタディを行うにあたっての留意点等について解説します。

3-5限：統計的調査手法について演習を行います。

## **IV. 成績評価の方法**

現代経営学演習では、論文審査の結果によってコース評価を行います。M1のうち、その論文執筆へ向けての基礎固めがいかに行っているかに応じて、評価を行います。

3月までにいかに基礎を固めるかによって、当然に論文のクオリティが変わってきます。かつてMBAゼミを指導した経験からいうと、毎回セッションに遅れず出席し、議論を多く重ねた方ほど優れた学位論文を執筆しています。したがって、皆さんもできる限り全てのセッションに遅れることなく出席し、議論に参加するようにしてください。

## **V. 受講生へのメッセージ**

社会人の皆さんが大学院に入学して研究するのは、単に実務上の問題に関するノウハウやハウツーを知るためだけではないはずです。それらの諸問題を相対化・客観化し、より広い視座に立脚して冷めた眼で検討し直してみることこそ、大学院で学ぶ意義があります。

例えば、「地球が太陽の周りを回っている」という事実は、地球上に居たのではなかなか実感できません。太陽の方が地球の周りを回っているかのごとくに、誤って見えてしまうわけです。地球というわれわれが生活している場を正しく知ろうとしますと、宇宙空間へと旅立って地球と距離を置いた位置から眺めてみて初めて、地球は丸い形をしていて、太陽の周りを回っていて…などなどの、地球に関する詳細な知識を得ることができ、それらの事柄についてより広く、深く理解できるようになるのです。日ごろ、実務上の課題ばかりに忙殺

されている皆さんは、MBA課程に入学され、日常生活から少しだけ離脱し、ちょっと離れたところから自らの実務を見直してみられると、きっと何か新しい発見やアイデアが思い浮かぶに違いありません。

この現代経営学演習では、皆さんが実務上で壁にぶち当たり解決したいと考えておられる諸問題が、経営学や人的資源管理論、組織論という大きな枠組みのなかではいかに問題設定されるのか、それを解いていくためにはどういう領域と方向性、分析視角で物事を捕捉し、どのように論理的思考を組み立てていったらよいのか、というアカデミックなスタンスで授業に臨んでいただきたいと思います。

なお、博士課程後期課程の大学院生(上林ゼミ)にTAないしLF (Learning Facilitator)として参加してもらったり、あるいは、適宜AA (Academic Adviser)の方々にも参加してもらったりして、皆さんのディスカッションを活性化する工夫を加えたいと考えています。

TA：浅井希和子さん（経営学研究科博士課程D2）

LF：島田善道さん（同D3）（正式呼称はシニア・ティーチング・アシスタント）

AA：庭本佳子さん（神戸大学大学院経営学研究科准教授），三輪卓己さん（京都産業大学経営学部教授），櫻田涼子さん（甲南大学経営学部准教授），千田直毅さん（神戸学院大学経営学部准教授），高階利徳さん（兵庫県立大学経営学部准教授），福井直人さん（北九州市立大学経済学部准教授）ほか。